大内クリニック　特別治療室１　――サンプル――

歳の差・オムツ・トコロテン・感度検査・前立腺初期化・尿道カテーテル・尿や精液の吸い出し・飲尿（受け攻め両方）・機械責め・陰茎麻酔・腸内洗浄（浣腸）・陰部撮影・陰茎切除・睾丸体内埋め込み手術等

他作品で特殊な手術を施している大内先生の病院のお話です。
他作品未読でもお楽しみいただけます。

「先生、今日ご予約の方が来られました」
「あ、ありがとう。すぐに行きます。お茶は出してくれたかな」
「はい。お連れの方もいらしてます。こちら要望書です。ご確認ください」
「ありがとう」

入院処置要望書
一．肛門からの刺激のみによる射精
二．陰茎切除・睾丸の体内埋め込み手術

計画期間三か月。
依頼人・成瀬　仁（三十五）
患者・成瀬　奏人（十八）

※　※　※

（怖い……）
清潔感のある病院。個人病院のようでそれほど大きくはないけれどかなり綺麗でまだできて数年だろうということが分かる。そしてこの応接室にある観葉植物はフェイクではない。栄養剤の入ったボトルも挿されている。床にはゴミ一つ落ちていないし輝きもあるし、窓やカーテンも――
「怖い？」
必死に周りに目を向けていたのに気付いていたのだろう。ご主人様が優しく訊いた。
「……はい……ご主人様」
素直に頷くとご主人様は頭を撫でてくれた。
「ちゃんと会いに来るよ」
「……はい」
今日からここに入院する。それを聞いたのは先週だった。

『奏人《かなと》。少しいいかな』
寝支度を終えたご主人様は奏人にベッドに寝転がるように促した。
『はい』
素直にベッドに寝転がり、ご主人様を待つ。もう抱かれる準備はできている。けれどその日、ご主人様は抱きしめるだけだった。
『ご主人様……？』
『奏人。奏人にもっと可愛くなってほしいな、と思うんだ』
『……はい？』
ここに来て十年。八歳のときに親に売られ、買ってくれたご主人様は奏人をたくさんたくさん愛してくれた。大事にしてくれた。学校には行けなかったけれど仕事の合間に勉強を教え、動物とも触れ合わせ、たくさん抱きしめて愛の言葉をくれた。
『今でも十分可愛いよ。けれどもっともっと可愛くていやらしい子になってほしいんだ』
『……はい……』
初めてご主人様と繋がったのは、奏人が十八歳になった誕生日の夜だった。それまで一切そういった知識は与えられていなくて、突然のことですごく緊張したしドキドキした。
でもそれをきっかけに、時折朝起きるとオムツが尿以外の何かで濡れていた理由も教えてもらったし――それまではおねしょの一種だと言われていた――ペニスが突然硬くなる恐怖からも解放された。
だから奏人の知識はご主人様に教わったことが全てだ。ご主人様の好むやり方でご主人様に奉仕する。だからそれでいいのだろうと思っていた。でもまさか足りていなかったなんて。教わってことは頑張って実行してきたつもりだったけれど、でもそれなら足りないと言ってくれれば勉強したのに。
『来週から特別な施設に入院してほしい』
『え……？』
それはもう一緒にいられないということだろうか。
『あの、僕っ……』
『あぁ……不安にさせたな、すまない。少しの間だけ入院して、それでもっと可愛くなってきてほしいんだ』
『……ここでは……ご主人様の好みにはなれませんか』
ご主人様が教えてくれたらちゃんと覚えるのに。
『……ちょっと特殊な処置が必要なんだ。最初はしないけれど、手術も必要になる。それでうんと可愛くなってから帰って来てほしい』
（ご主人様がそう望むなら……）
でも、やはり寂しい。怖いとも思う。けれど買い取ってくれたご主人様に逆らうことはできないし、何より大好きなご主人様の希望を叶えたかった。
『もちろん会いに行くよ。休みの日には必ず様子を見に行く。こうして毎日一緒に寝ることはできなくなるが、愛する気持ちは変わらないよ』
『……はい……』

それから昨夜までの一週間、ご主人様は仕事を休んでずっと一緒に過ごしてくれた。朝起きて、キスをもらって。寝癖が可愛いと頭を撫でてもらって。それでも直らなくて笑われて。一緒にシャワーを浴びようと言われて身体の隅々まで丁寧に手で洗ってもらった。髪だって乾かしてもらって、そしたら寝癖ももちろん直って。ご飯は口移しで食べさせてもらった。ご主人様が噛んでくれたので、膝の上で横抱きにされたまま飲み込むだけでよかった。歯磨きの代わりだよなんて言われて口内を舐められ、ペニスが勃起すれば撫でられた。でも射精はさせてもらえなくて苦しくて、本当は弄ってほしかったけれど、きっとそういうのがご主人様の好みでなかったのだろうと思うと我慢できた。

それからご主人様の味を忘れてしまわないようにと舐めさせてもらって、口に出してもらって。吐き出しなさいという言葉を無視して飲み込んだら困ったように笑われて。一日中ベッドで裸のまま身体を擦り合せて興奮して、好きだとたくさん言い合いながら過ごした。

「……寂しいです」

「あぁ……俺も寂しいよ。でもちゃんと会いに来る。連絡もする。頑張れるかな」

「……はい」

何をされるのかは分からないけれど、頑張って耐えてご主人様好みになって迎えに来てもらうのだ。

「愛してるよ」

「……僕も愛しています……」

見つめ合って愛を確認したときだった。部屋にノックの音が響く。ビク、と揺れた身体はご主人様が慰めるように撫でてくれた。

「失礼します」

「お世話になります」

立ち上がったご主人様に倣い立ち上がる。

「こんにちは。成瀬さんと奏人くんですね。担当医の大内です」

「はい。奏人」

「あ、あの、宜しくお願いします」

「こちらこそ。どうぞお座りになってください」

椅子に腰を下ろし、それから渡された書類を見る。

「今日は内容のご説明の後でそのまま入院ですね」

「はい」

ご主人様が頷く。あぁ、本当にこのままお別れになってしまうのだ、と寂しくなる。

「奏人くん、頑張ればすぐにお迎えに来てもらえるよ。頑張ろうね」

「は、はいっ」

でも何も知らないのだ。何を頑張ればいいのかも。でも頑張れば早く帰れる。それなら内容がどんなものだろうと頑張るしかない。

「では内容のご説明をさせていただきます」

恐らく、というか、確実にご主人様は内容を知っているだろう。だからこの時間は奏人への説明と、ご主人様への最終確認なのだ。

「ではまず、予定している入院期間は三か月です」
「えっ」
まさかそんなに長いなんて。せいぜい二週間程度かと思っていた。
（そんなに長く一人で過ごすなんて……）
ご主人様の家に来てからずっとご主人様と一緒に眠っていた。どんなときでも一緒で、出張だというときは一緒に行ってホテルで過ごしていた。それくらいどんな夜でも一緒だったのに。
「……奏人くん、寂しいけれど、でもご主人様は会いに来てくれるよ。それに頑張ればご主人様の好みになれる。頑張ろうね」
「……はい……」
もう入院は決定事項なのだ。今更嫌だとか怖いとか言って迷惑を掛けることはできない。小さく返事を返して書類を見る。そこには分かりやすく説明が書かれていた。
「まず、入院して――今日ですね、今日、これから入院してもらって、まずは病室に案内します。広めの個室なのでもちろん成瀬さんにも泊まっていただけます」
「はい」
「それから一通り血液検査などをしてから今日はゆっくり過ごしてもらいます。本格的に始まるのは明日からです」
一体何が始まるのだろう。怖い。ドキドキする。
「まず第一段階として、奏人くんにはアナルからの前立腺刺激で射精できるようになっていただきます」
「はい」
（え……）
アナルから。前立腺。
当然聞いたことはあるし、普段セックスでもご主人様が弄ってくれて気持ちいいところだ。でも、そこをここで弄られる――？
「奏人、奏人はまだおちんちんを弄らないと射精できないだろう？　でもおちんちんを弄らなくても射精できるようになってほしいんだ」
「あ……」
確かにイくときはペニスを刺激してもらう。そうするとすぐにイってしまうのだけれど、逆を言えばどんなに身体が昂っていてもそこを弄ってもらわないと射精することはできないのだ。
「それから……いえ、その後の説明はそのときになってからにしましょうか。で、まずアナルからの刺激で射精できるようになってもらうため、ペニスに麻酔を打ちます」
「ひぃっ」
思わず変な声が出てしまった。医師とご主人様が奏人を見る。
「……すみません」
「いえいえ、驚いたよね。でもペニスの感覚が残っているとどうしても意識がそちらに向いてしまうから。だから感覚をなくして退路を断つんだよ」
「退路……？」

「身体を拘束されていても、ペニスを弄ってもらえば射精ができる――そう思ってしまうといつか医師が根負けして弄ってくれるのではないか……そう思うようになってしまうんだ。でも麻酔を打って感覚そのものをなくしてしまえば、触られても満足することはできないよね。そうなると必然的にイくには前立腺に集中するしかないと思うようになるんだよ」
「……はい……」
相槌を返すことしかできない。だってそんな……ペニスに麻酔を打つなんて。想像するだけで痛い。
「成瀬さん。奏人くんはペニスで痛みを覚えたことは？」
「いえ、痛みを与えたことはありません」
そうだ。ご主人様はいつでも気持ち良くしてくれるだけだった。痛いと感じたことなど一度だってない。優しくて柔らかくて温かいだけ。
「そうですか……そうすると麻酔の針が少し痛いかもしれないけど一緒に頑張ろうね」
やはりやらないという選択肢はないらしい。膝の上で手を握る。
（耐えるしかない……）
でも大好きなご主人様が決めたこと。
「奏人」
「あっ……」
呼ばれて隣を見ると手を握られた。拳を温かくて大きな手が包んでいる。
「……頑張ります……」

〜〜〜〜

「血液検査にも問題はないので、まずはお尻の中を綺麗にしようか」
朝食後、医師がやってきてそう言った。すぐさま控えていた狭山が動き出す。そして同時に医師が「またあとで」と言って退室していった。
「ではお尻に浣腸をしますからね。五分我慢をしましょう」
「えっ」
「はい？」
「あの……僕、うんち我慢したことなくて……」
いつでも屋敷の中で過ごしていた。外に出ることは稀で、外に買い物に行くようなことがあれば必ず排便をさせてもらってから行っていたのだ。だから排便を我慢するという経験がない。
「……では栓をしましょう。お薬を入れたらうんちがしたくなりますので」
「分かりました」
横を向いて膝を抱えるように丸まると、アナルに狭山の指が触れた。そして細いものが入って来て、冷たい液体が直腸を濡らす。
「わっ」
「ちょっと気持ち悪いですけど、大丈夫ですよ」

注入はすぐに終わり、そして指くらいの太さの物が差し込まれた。
「これで五分我慢しましょうね。出していいときになったらまた来ますから」
そう言ってオムツを戻し狭山までも退室してしまう。広い部屋で一人きり。室内は真っ白で気を紛らわせるものもない。
「ひゃっ！」
すぐに排便感がやってきた。出したい。出したい。なのに出せない。苦しい。お腹の中がぐるぐるしている。
「やああっ！」
出したい。出したい。楽になりたい苦しいお腹が痛い。
「うぅぅ……」
こんなつらいことをされたことは過去に一度もない。お尻を綺麗にするときだって温かいお湯を入れてもらって、入れたらすぐに出させてもらっていた。場所はオムツだったりオマルだったり。ペットシーツというときもあった。でもそれは部屋を汚してしまいそうで怖かったけれど……とにかくこんな苦しいまま放置されたことなんて一度もなかった。
（怖いよぉ）
漏れてしまいそう。なのに漏れない。漏れた方が楽なのに。でも出しちゃダメだと言っていた。それに頑張ったら早く帰れるし、きっとご主人様も褒めてくれる。なら頑張らないと。我慢しないと。でも苦しい。出したい。お腹の中で便が暴れている。
「やああ……出したいぃ……」
でもまだ狭山は来ない。勝手に栓を抜いたら怒られるだろうか。
いや、抜いたらきっとその瞬間漏れてしまうだろう。そしたらベッドを汚してしまう。二日目にしてベッドを大便まみれにしてもしクビになったら。クビという表現は正しくないかもしれないけれど、ここを出ていってくださいなんて言われたらご主人様の好みになれなくなってしまう。
（そんなのダメ……！）
ここに来るまでの一週間、ご主人様もたくさん「寂しいよ」と言ってくれた。だからきっとご主人様にとってもつらい決断だったのだ。でもそこまでしてでも好みになってほしいのだ。理想の奏人に。もっと可愛くと言っていたからだから――。
（痛いよぉ……）
でも声を出すのだけは必死に耐えた。唇を噛んで声を殺す。
「うぅ……」
痛い。苦しい。でも我慢。そういえば今何分経ったのだろう。もう十分以上経っていそうなのに。可能な範囲で視線を巡らせるが時計は見当たらない。そういえば時計なんてこの部屋にあったっけ。さっきどうやって七時だと思ったんだっけ――。
コンコン――。
「失礼します。どうですか」
「うんちっ、出したいですっ」

「はい、五分経ちましたから出しましょうね」
やはり今が五分なのか。五分というのはこんなにも長いものなのか。
「栓を抜きますが、オムツを戻すまで我慢してくださいね」
言いながら狭山がオムツを外す。テープタイプのそれははらりと股間を露出させた。
「やっ……」
「大丈夫、我慢できますよ。今入っている栓をぎゅっと締め付けるようにしてみてください」
「んっ」
「そうです……じゃあ抜きますよ」
狭山は慣れた手つきですっと栓を抜き、すぐにオムツをあててくれた。
「いいですよ」
「あああああ！！」
ご主人様以外の人間に排泄を許可されたのは初めてだった。でも恥ずかしいなんて思う余裕はない。ドバドバと柔らかい便が噴き出すように飛び出した。
「あ……ぁ……」
「大丈夫ですか」
「ん……出ました……」
便秘ではなかった。けれどたくさん出たような気がする。
「じゃあオムツを替えましょう。次はお湯を入れて中を綺麗にしますよ」
それから三回お湯を入れられた。全てオムツに吐き出して、オムツに残った汚れを見られる。
「……うん、いいでしょう。では先生を呼んできますので待っていてくださいね」
酷く疲れていた。洗浄自体は慣れているのに人や場所が違うからか。それとも浣腸を我慢させられたからか。
「はぁ……」
身体が重い。幸い腹痛が残ることはなかったけれど、これを毎日されると思うと憂鬱だった。
顔を横に向けて窓の外を見る。明るい。良く晴れている。でも空しか見えない。
コンコン――。
「はい」
「失礼します。中の準備ができたね」
入ってきたのは医師と狭山。上体を起こして頭を下げる。
「はい」
「では早速治療を始めようか。本来はペニスに麻酔をして、感覚をなくした状態で前立腺を刺激していくんだけど、今日はまず前立腺の感度を調べてみて、感度が悪いようなら感度を上げる処置をしてからペニスに麻酔をかけていくよ」
「はい」
感度の検査、なんて初めて聞いた。けれど病院だからきっと測る何かがあるのだろう。
「では部屋を処置室に移動します」

ベッドを降りてスリッパを履く。医師と狭山について行くと、『治療室』と書かれた部屋に通された。
「下だけ裸になってこの椅子に座ってね」
見たこともない椅子だった。大きくて、マッサージチェアのようだ。おずおずと近寄ると狭山が目の前に膝を着きズボンとオムツを脱がせてくれた。
「奏人くん、これは検診台と言うんだよ。産婦人科でよく使われるんだけど……テレビの出産シーンとかで観たことあるかな」
説明をしてくれたのは医師だった。恐らく怖がらせないためだろう。けれど出産シーンという言葉に怖くなる。だって覚えがあるのは足を大きく開いて絶叫する女性しかない。
「あ……え、と……痛い……ですか」
「ん？　麻酔をするときはちょっとチクッとするけどそれだけだよ。あ、もしかして出産シーンが浮かんじゃったかな」
医師が笑う。それに曖昧に頷いた。
「今からするのは出産じゃなくて検査だから。あとは治療。だから痛くないよ、大丈夫」
その言葉に安心して椅子に座る。すると狭山が隣に来てくれた。
「椅子が上がるから、ここを握っていてくださいね」
椅子の脇にあった手すりのようなもの。左右それぞれを両手でぎゅっと握ると台が上がった。そして背もたれも倒れていく。
「わっ」
「危ないからそのままね」
椅子が上がると同時に足が開き、そして座っていたはずの座面の感触がなくなった。
「痛くない？」
「大丈夫です……」
でも身体に力が入ってしまう。身体はほぼ仰向けになっているのに、座面がないので落ちそうで怖い。
「じゃあまず前立腺の感度を調べるからね」
医師が陰部の前に座っている。怖い。
「お尻に機械を入れるよ」
にゅる、としたものが入ってきた。でもこの感じなら知っている。ご主人様がペニスを入れるときも同じような感じだ。ローションがついているのだろう。
「あっ！」
気持ちいいところに機械が触れた。そこをこりこりと擦られる。嫌なのに開いた口から声が漏れる。
「あっ、あっ」
「うん、感度は悪くない……のかな」
隣では狭山が手を包むように握ってくれているのに、その頭は陰部を覗き込んでいる。見られている。
「機械を抜くね」
「はい、力を抜きましょうね」
力を抜く――そう言われても椅子から落ちてしまいそうで怖い。

「奏人くん、大丈夫ですよ、落ちないからゆっくり息を吐いてみましょう。深呼吸ね」
狭山が頭をこちらに向けた。優しい顔で見下ろしている。安心していい、信じていい。頭では分かるものの、身体から強張りは解けない。
「奏人くん、じゃあんーってちょっとお尻に力を入れてみようか。うんちするみたいに力を入れてごらん」
それならできそうだった。アナルの中のものを出すように力を入れる。
「んーっ！」
「そう上手、奏人くんはいいこだね」
（褒められた！）
嬉しい。普段はご主人様や屋敷のスタッフに褒めてもらうけれど、それはもう家族のようなもの。こうして他人に褒めてもらえるなんて初めてで嬉しい。
「じゃあ次、指を入れてみるからね。もう一度んーってしてみてくれる？」
「んーっ！」
褒めてほしくて思い切り力を入れる。便が出てしまったらどうしようと一瞬思ったけれど、そう言えばお尻の中は綺麗にしてもらったのだと思い直す。
「はい上手……うん、入ったよ。力を抜いていいよ」
「はい」
今度はスムーズに力を抜けた。といっても足には力が入ってしまう。だって座面がない今、ずり落ちないためには折れた膝の部分と手すりに頼る以外ないのだ。
「うん上手だね！」
医師が褒め、それから狭山も「上手にできて偉いですね」と言ってくれた。
「じゃあ前立腺に触るからね。声は我慢しないで。気持ちいいなと思ったらちゃんと言ってね」
「はい」
ご主人様以外に気持ち良くしてもらうのは初めてだ。少しドキドキするけれど、気持ちいいことは大好きなので楽しみでもある。
「よいしょっと」
「あっ！」
医師が触れたところはまさしく奏人の好きなところだった。
「うん、ここだね」
コリコリコリコリと指先で突くように捏ねられる。
「あっ、あっ、あっ！」
すごく気持ちいい。触り方がご主人様と違う。初めて感じる刺激だった。
「ああっ」
「うん、気持ち良さそう。おちんちんもちゃんと勃起できたね」
「あっ、きもちいっ、気持ちいいよおっ」
「いいこ。ちゃんと気持ちいいって教えられるね」
医師は話しながらずっとそこを捏ね続けた。

「ああっ、ああああっ、気持ちいいっ、気持ちいいッ」
ちゃんと気持ちいいと言うだけで褒めてもらえる。気持ち良くて褒められるなんてすごい。
「前立腺の感度は良さそうだけど、これだけだとちょっとまだ弱いかな……」
普段はどうやって射精するの？　と訊かれて一瞬言葉に詰まる。なんと説明したらいいのかよく分からなかった。
「えと……」
「ご主人様にお尻にペニスを入れてもらう？」
きちんと答えさせるためか、指の動きが止まってしまう。寂しい。気持ちいいところをコリコリしてほしい。
「ん、はい……」
「それで？　奏人くんが射精するときはどうしているのかな」
「えと……ご主人様がおちんちんよしよしして……」
「よしよし、か。どれくらいよしよししてもらうの？」
「ちょっと」
「ちょっと？」
「はい……ちょっとだけ」
「どれくらいしてもらうのかな」
「えっと……握って、二回くらい」
「二回？　手を二回動かすってこと？」
「はい」
目を閉じて、ご主人様とのセックスを思い出す。体位は正常位も後背位もどっちもする。どちらのときでも射精したくなったところでご主人様がペニスを握ってくれる。
（……しゅ、しゅ……）
やはり二回だ。
「はい、二回……くらい。あとはたまに一回です」
「そう……余程ペニスが敏感なのかな……それとも前立腺でギリギリまで昂ってるのかな……」
「奏人くん、おちんちんしてもらうの好きですか？」
ずっと黙って見守るだけだった狭山が口を開いた。
「はい好きです」
「普段どんなときに可愛がってもらいますか？　セックスのときだけですか？」
「いえ、おしっこのときとか……」
「おしっこのとき？　持ってもらうの？」
食いついたのは医師だった。
「えと、先っぽを咥えて、吸ってもらって出します」
「吸ってもらわないと出ない？」
そんなことより早く前立腺を捏ねてほしかった。けれどここは病院で、言うことを聞いていないといけ

ないのだと思い出す。
「えと、ご主人様と一緒にいるときは吸ってもらわないと出せません。けど、一緒にいないときはオムツに出せます」
「そう……じゃあやっぱりペニスに触れて促してあげる癖がついているのかな……」
それは独り言のようだった。返事を求められなかったので黙って待つ。けれど入れられたままの指を動かしてほしくて、ついアナルを締め付けてしまった。
「あ。あぁ……ごめんね、寂しかったね」
「ひゃああっ！」
医師がアナルの収縮に気付き指を動かした。完璧に覚えられてしまったらしい前立腺を捏ねられ腰が跳ねる。
「あ！　危ないですよ」
狭山が慌てたように身体を押さえるが、腰の揺れは止まらない。だってやっともらえたのだ。もっとほしい。もっと強い刺激がほしい。
「うーん……どうしようかな……」
悩ましげな声を上げながらも、医師はコリコリと前立腺を捏ねる。あまりの気持ち良さに一瞬ここが病院だということを忘れてしまった。
「あっ、あっ、ごしゅっ、ご主人様っ」
つい癖で呼んでしまった。
「ごめんね」
その申し訳なさそうな声に、ここが病院だと思い出す。
「あっ……ご主人様ぁ……」
そうだ、ここにはご主人様はいないのだ――そう思ったら途端に寂しくなってしまった。けれど医師は前立腺を弄るのを止めてはくれなくて、快感を知る身体はビクビクと跳ねながら更なる快感を――絶頂を求めた。
「……やっぱりペニスへの慣れだな……精通したのは……いつだったかな」
医師が言うと狭山が離れた。手の温もりがなくなって一気に心細くなる。
「……十五歳ですね」
「遅いな」
「性教育は施さなかったようです」
「そうか……何も知らないんだな」
「自慰はなく、そのまま十八になるのを待って性交を教えたようです」
「ということは自慰経験がないまま他人の手での快感から知ったのか」
「そのようです」
「え、待って、十八になるのを待ってって、誕生日いつ？」
「一か月前ですね」
「ってことは知ったばかりかぁ……」

医師と狭山があれこれ話している間も前立腺を捏ねる指は止まらなかった。気持ちいい。もう出したい。なのに出せない。
「おちんちんしてぇっ」
「ん？　出したい？」
「出したいっ、出したいよおっ」
「でも奏人くんはおちんちんに触らずに射精できるようにならないといけないんだよ」
「それがご主人様のご依頼ですからね」

〜〜〜〜

「んんっ……」
ご主人様の舌が口の中に入ってくる。気持ちいい。歯列を舐められるとぞくりとして思わず腰が揺れてしまった。
「んっ……あっ」
「こら。おちんちんを擦りつけようとしているな？」
「やぁ……」
そんなつもりはなかった。けれど、結果的にそうなってしまった。
「でも貞操帯がついているんだよな……」
「はい。おちんちん、大きくなろうとすると痛いです」
「そうか、つらいな」
「はい……」
でも一番つらいのは寝ている間だった。勃起の痛みで何度も目が覚めて、その度に隣にご主人様がいないのに気付いて一人で寝ていることを実感してしまう。それが何よりつらかった。もし今隣にご主人様がいたら勃起が落ち着くまで身体を抱きしめてくれていただろうな、と思って。
「でももうそんなつらいのも今日で終わりだよ。明日になったらもう勃起の苦痛から解放されるから」
「嬉しいです」
やっと寂しい夜からの解放だ。一緒に寝てもらえるし、勃起の痛みで目が覚めることもない。もし覚めたとしても隣にはご主人様がいてくれるのだ。
「ご主人様ぁ……」
今はとにかく甘えたかった。この一週間、寂しかった分たくさん甘えたい。
「可愛いよ奏人……」
キスをねだるとちゃんとくれる。背中に手だって添えられているし、体温も匂いも感じられる。夢じゃない。夢にまで見た温もりだった。
「ご主人様ぁ……」
「……奏人、先生も言っていた通り今日でおちんちんや陰嚢とはお別れだから、今のうちにちゃんと見ておきたいな」

「はい！」
嬉しい。見てもらえる。ベッドに移動していそいそとズボンを脱ぐと、オムツはご主人様が外してくれた。
「うん、可愛いおちんちんがちゃんと見える」
「はい……もうずっと触っていません」
「そうだね……これじゃあ触れないね」
本当はご主人様に触ってほしかった。最後だから。
そしてどうやらご主人様も同じように思ってくれていたらしい。
「……最後だし、おしっこと精液を吸い出してあげたいけど……せっかく頑張って我慢してくれたから、その頑張りを無駄にしないように俺も我慢しないとな」
「ご主人様……」
ご主人様が我慢をしてくれている。奏人のために。幸福感がじわりと胸に溢れた。
「手術が終わって、傷が痛まなくなったらたくさん吸い出してあげるから」
「はい……」
嬉しい。先のことまでちゃんと考えてくれているなんて。
「可愛い……もうなくなってしまうかと思うと寂しいが、今のうちに可愛がろう」
「え……？」
可愛がる――それはいつも口や手で愛撫されるときに使われる言葉だった。
「奏人の可愛いおちんちん……」
ご主人様はそう呟くと股間に顔を近付けた。何だろうと見ていると、貞操帯越しのペニスへのキス。
「ぁっ……」
「貞操帯越しでも感じる？」
「はい……」
感触は伝わってこない。でもご主人様がそこにキスをしてくれた――それを見るだけで心が感じてしまった。
「おちんちん痛いっ……」
「あぁ、勃起しようとしてる……まだおちんちんはちゃんと自分の仕事を覚えているんだな……」
「お仕事……？」
「おちんちんは穴の中を擦って気持ち良くなるのがお仕事なんだよ」
（え……おしっこじゃないの……？）
それに穴の中を擦る、なんて。そんなこと奏人のペニスは一度だってしたことがない。
「僕のおちんちん……」
「うん、奏人のおちんちんは一度もお仕事をしていないな。だから取ってしまってもいいんだよ」
「そう……なんですか」
「うん。でもその代わり俺のペニスはちゃんと奏人のお尻の穴の中でお仕事をしているだろう？　奏人の分も俺がするからいいんだよ」

「あ……ありがとうございます！」
代わりにしてくれるなんて。やっぱりご主人様は優しい。
「ちゃんと睾丸はお仕事を続けるし……」
「ぁんっ」
急にご主人様が陰嚢を掬った。そしてキス。
「でもこの感触がもうなくなると思うとやはり寂しいな」
「んっ……」
確かにセックスのときでなくてもご主人様はよく陰嚢を揉んでくれた。たくさん精液が出せるようにとマッサージをしてくれたこともあった。
「今のうちに写真を撮っておこうか」
「え……？」
「今の姿を残しておこう。嫌かな」
「嫌じゃないです！」
嬉しい。今の身体が嫌だから手術をするわけではないのだ。だってペニスも陰嚢もこんなに大事に扱ってくれる。
「じゃあ、自分で足を大きく開いて、恥ずかしいところをちゃんと見えるようにしてごらん」
「はい」
膝裏を抱えて足を大きく開く。検診台で足を開くことには慣れた。腰を上げるようにしてアナルまで見えるようにする。
「あぁ、すごく上手だ」
ご主人様はにこにこしながらたくさん褒めて、そして携帯でたくさんの写真を撮ってくれた。
少し離れたところから身体全体が写るもの。それからおちんちんのすぐ近くで、貞操帯の中がちゃんと写るように光の角度を計算しながら。自由な陰嚢は体勢を変えて後ろから撮ってもらったり、寝転んで携帯を構えるご主人様を跨いで下から撮ってもらったり。アナルは自分の手で、お肉を裂くようにして開いて撮ってもらった。
「可愛い写真がたくさん撮れたよ」
「ん……嬉しいです」
それから動画も撮ってもらった。柔らかさが分かるようにと陰嚢を揉むところや、少しだけ勃起して貞操帯の中がペニスでパンパンになったところ。そしてそれが痛みで萎えていく様子まで。刺激を求めてひくひくパクパクするアナルだってちゃんと撮ってもらった。
「宝物が増えたよ。ありがとう」
「はい」
その後はオムツを戻してもらった。尿意があったのだ。でも、出せない。
「ご主人様ぁっ」
「大丈夫、ゆっくりでいいよ」
今までご主人様といるときはいつでも尿は吸い出してもらっていた。一緒にいるときでオムツに出すの

は寝ている間の無意識のおねしょだけ。こうして意識があるのにオムツに出したことは一度もない。
でも今は貞操帯があるから吸ってもらうことができない。苦しい。
「やだぁ……」
「大丈夫……手術の後も、しばらくは吸ってあげられないから……だから今のうちにオムツに出そう」
「んっ……」
出したい。でもどうやって出したらいいのか分からない。
「……部屋から出ていようか」
「やっ！」
そんな寂しいことを言わないでほしい。離れたくない。ずっと腕の中にいたい。だって一週間以上も頑張ったのだから。
「じゃあ目を閉じて、ゆっくり身体の力を抜いてみよう。それでダメならおちんちんに管を入れてもらおうか」
「ん……」
尿意がつらい。お腹の奥がツキツキする。けれど出せない。出したいのに。
「ご主人様ぁ……出ないぃ……」
「うん……」
ご主人様も困っていた。出せないと病気になってしまう。ここは病院なのだから病気になっても構わないのかもしれないけれど、痛いのは嫌だ。
「じゃあ、カテーテルを入れて中のおしっこ取り出してもらおう」
今はとにかく楽になりたかった。それにご主人様が「そんなこともできないのか」なんて言わないでいてくれたから、素直に頷くことができた。
ナースコールを押すと狭山はすぐに来てくれた。そしてご主人様が事情を話してくれて、すぐに管の準備をしてくれる。
「でもペニスに触れる感触を与えてしまうので、先に麻酔を行います」
「はい……」
またあのちくりとしてヒヤッとするのに耐えなければならない。
（やだ……でも……）
今はご主人様が一緒にいてくれている。狭山が医師を呼ぶ間にも、ご主人様は手を繋いでくれていた。
「はい、じゃあちくっとするからね」
「はい……」
医師はすぐに来て、それから麻酔をしてくれた。おしっこを取り出すのは狭山がしてくれるそうで、忙しいのかすぐに戻ってしまったけれど。
「じゃあ貞操帯を外しますね」
その感触すらもうなかった。感覚のないペニスが狭山の手の中にあるのをただぼーっと見つめる。
「奏人、本当に感覚がないのかな」
「はい。全く何もないです」

「そうか」
ご主人様もじっと処置の様子を見守っていてくれた。
「入りましたよ」
狭山がそう言うと同時に透明なチューブの中を黄色い液体が通っていった。そしてベッドの柵部分に引っ掛けられたパックに溜まっていく。
「自分でおしっこが出せないとのことなので、このままにしておきましょう。どちらにしても手術中もカテーテルを入れますから」
「分かりました」
狭山が丁寧にお辞儀をして出て行くのを見送って、それからあて直されたばかりのオムツをご主人様が開く。
「これも写真に撮っておこう」
「はい」
当然まだペニスの感覚はない。けれど貞操帯の先端から伸びる管はいやらしくも見える。でもどんなに興奮してもペニスが勃起することはない。感覚自体がないからだろう。
「あ、そういえば……ご主人様」
「うん？」
何枚も何枚も角度を変えてご主人様は写真を撮った。邪魔かもしれないと思いながらそのまま言葉を続ける。
「おちんちん、勃起しなくても射精ってできるんですね」
「あぁ、早漏の基準って知っているかな」
（早漏？）
初めて聞いた単語だった。
「早漏って何ですか？」
「早漏と言うのは、射精までの時間がとても短い人……つまりすぐに射精してしまう人のことだよ」
「……僕もですか？」
「うん、そうかな」
「そうなんですか」
（僕は早漏なのか……）
「奏人が早漏なのは可愛いからいいんだけれど、抱く側が早漏だったら……例えば俺が奏人に入れて、それですぐ射精して終わってしまったら奏人はどう思うかな」
「嬉しいです」
だってそれくらい中が気持ち良かったということだろう。
「……あぁ、そうか、そうだな。ありがとう」
「はい……？」
ご主人様が苦笑している。なぜありがとうと言われたかは分からないけれど、ご主人様は今度はおかしそうに笑った。

「でも、満足できないだろう？　もっと擦ってほしかったって思わないかな」
「それは……多分思いますけど……でも僕が気持ちいいよりご主人様が気持ちいいのが大事です」
「うん、ありがとう。可愛いよ」
「はい……？」
どうして今度は可愛いと言われたのだろう。よく分からないけれど、またご主人様は笑った。でも笑ってくれて嬉しい。笑顔がたくさん見られて嬉しい。だからまぁ理由はいい。
「でも、やっぱり俺はもっと奏人に気持ち良くなってほしいし気持ち良くさせてあげたいって思うんだよ。だから早漏には治療があるんだ。イくのを遅くさせる治療がね。で、その早漏の基準にはいくつかあるんだけれど、その中には勃起前の射精というものがあるんだ」
「そうなんですか……」
「だから、勃起しなくても射精してしまう人はいるんだよ」
「じゃあ僕、やっぱり早漏なんですね」
「うん。元から奏人は早漏だったけれど、それでも今回はもっと可愛い早漏になる治療をしたと思えばいいんじゃないかな」
「早漏になる治療……」
よく分からないけれど、それがご主人様の希望なのだろう。可愛い早漏。
「ペニスへの刺激がなくても射精してしまうなんて可愛いだろう」
「……ご主人様が可愛いと思ってくれるなら嬉しいです」
難しいことは分からない。奏人の知識はご主人様や屋敷の人たちが教えてくれたことが全てだ。特にペニスに関することを教えてくれるのはご主人様だけ。だから、とにかくご主人様がいいと思うならそれでいい。
「じゃあ、その可愛い姿を見せてくれるかな」
「え？」
「お尻だけでイくところを見せて」

約４万８千文字です。

宜しくお願い致します。

gooneone